

3

# バレちゃつた……!?

(ええつと、このお店はどこにあるんだつけ。)

立ちどまつて、スマホをチェックする。

今日のわたしは、<sup>おお</sup>大きなリボンつきブラウスと、ネイビーのミニスカを<sup>あ</sup>合わせた大人めコーデ。

ソール高めのローファーと、エナメルのショルダーをカカオブラウンでそろえたのがポイント。

髪は、ミルクティーベージュのロングヘア。

もちろん、おねえちゃんのウイッグだ。

休日の今日、ほしかったコスメと服や小物をゲットしてきたところ。

といつても、どれもおこづかいで買えるプチプラのものばかりなんだけど。

せつかく街まで出てきたんだから、なにか甘いものでも食べて帰ろうと地図アプリで確認したら、この近くにチーズケーキ専門店があるって表示された。

一番人気のコーヒーチーズケーキは、一日限定十個なんだって。なにそれ。

絶対食べたいやつ。

早く行かなきや、なくなつちやう！

スマホをしまつて、歩きだす。

ひとりでカフェに入れないって子もいるらしいけど、わたしは平気！

むしろひとりのほうが気兼ねなく写真を撮れるし、時間を気にせずまつたりできる。（このあたりのはずなんだけどな。）

もう一度地図を見たら、お店は公園の向こう側にあるみたい。公園をつづきつたほうが近道だ。

あとちょっととところで、すごい人だかりが見えた。

（もしかして、並ばなきや入れないくらい人気なのかな。限定のコーヒーチーズケーキ、

なくなつてたらどうしよう。)

心配しながら、近くまで行つたところで、ハツと息をすつた。

ひとりだかりのまんなかにいるのは、同じクラスの水無瀬くん!?

「LEO～！」

「やつぱ、カツコいい！」

女の子たちは、きやあきやあ言いながら、水無瀬くんを取りかこんでいる。

「プライベートだから、写真は撮らないで。」

めがねをかけた水無瀬くんが、両手で顔をかくして頼んでるのに、女の子たちはかまわらずスマホを向けている。

きつと、水無瀬くんが普通に歩いていたら、ファンの子たちに見つかって、取り囮まれてしまつたんだろう。

めがねで変装したつもりなのかもしれないけど、そんなので、あの芸能人オーラを消せるわけないのに。

気がつくと、騒ぎに気づいた人たちがどんどん集まつてきて、さつきよりもずっと人が

増えている。

ちゅうしん

みなせ

ほんき  
こま

みたいだ。

その中心にいる水無瀬くんは、本気で困っているみたいだ。  
(助けてあげようかな……。けど、早く行かなきや限定のコーヒーチーズケーキがなく  
なつちやうし。)

そこで、ふと思<sup>おも</sup>いだす。

水無瀬くん、前に、わたしの消<sup>け</sup>しゴムをわざわざ拾<sup>ひろ</sup>ってくれたよね……。

なのに、困つてる水無瀬くんを無視してチーズケーキを優先<sup>ゆうせん</sup>させるつて、人としてどう  
だらう?

それに、助けたところで、わたしがクラスメイトだなんて気がつかないよね。

席<sup>せき</sup>が近<sup>ちか</sup>い小池さんですら、わたしがとなりに座<sup>すわ</sup>つっていてもまつたく気づかなかつたら  
いだし。

そもそも、水無瀬くんは、ほとんど学校<sup>がっこう</sup>に来てないんだから、存在感<sup>そんざいかん</sup>ゼロのわたしのこ  
となんて覚<sup>おぼ</sup>えていな<sup>い</sup>はず。  
(だつたら、ここは助けてあげなきや!)

わたしは、公園の木のかげにかくれてから、すつと息を吸いこんだ。

「見て！ あつちで甲斐亜嵐の撮影してる！」

大声で叫んだら、

「え、うそ。」

「LEOだけじやなくて、亜嵐もいるの？」

水無瀬くんを囲んでた子たちの視線が外れる。

（今だ！）

わたしは、今日買ったばかりのキャップをふかくかぶり、すばやく水無瀬くんのそばにかけつけた。

「こつち来て！」

小声で耳元にささやき、腕を引く。

いきなりそんなこと言つて、あやしまれるかと思つたけど、水無瀬くんは意外なほど素直にわたしのあとをついてきた。

「あ！ LEOが逃げちゃう！」

誰かの声を背中で聞きながら、走つてそばにあつたコンビニの裏に回る。  
そこから、細い路地を右に左にいくつも曲がり、ようやく誰もいない遊歩道に出た。

「ここまで来たら、大丈夫かな。」

はずむ息を整えて、つぶやくと、

「なんで助けてくれたの？」

水無瀬くんが、ずれためがねのまま、とまどつた表情でたずねる。

「その前に、ちょっとごめん。」

そう断りを入れてから、持つていたバッグを開けた。

今、手元には、ちょうど買ったばかりのコスメがある。

これを使えば、今よりちょっとマシに変装させてあげられるはず！

「LEOだつてこと、みんなにバレちゃ困るよね。だつたら、わたしにまかせて。」

そう言いながら、取りだしたヘアクリームを両手につけ、水無瀬くんの髪にもみこんで

いく。

「これも、取るね。」

めがねを外して、アイブロウペンシルでまゆをかき、パウダーをまぶたにのせた。

コームで髪をなでつけて、シャツのすそを思いつきりボトムに押しこむ。

ついでに、ボタンも首元までしつかりとめ、最後にめがねを戻したら……。

「はい、できあがり。」

わたしの言葉に、されるがままだつた水無瀬くんがハツと意識を取り戻して、自分の姿を見た。

「うわっ、なにこれ。」

水無瀬くんは、そばに停まつていた黒いワンボックスカーの車体にうつる自分の姿を見てぼうぜんとした。

そりやあそんだ。

カツコいいLEOとはぜんぜんちがう、ザ・まじめな中学生ファッショニ変身してゐんだから！

「見る？」

わたしが手鏡を渡すと、水無瀬くんは自分の顔をさわりながらつぶやいた。

「すごつ、俺の顔が別人みたいになつてる……！」

「まゆの形を変えて、まぶたをメイクでわざとはればつたくさせたの。あとシェーディングで顔のりんかくも変えてみたし。」

「ええつ、あの短時間で？」

おどろく水無瀬くんに、

「こんなの、簡単だよ。家に帰つてしつかり洗つたら元に戻るから。そのメイクのままいれば、バレずに家まで帰れるよ。」

そう説明していたら、わたしたちと同じ年くらいの女の子たちの集団が、こつちに向かつて歩いてくるのが見えた。

水無瀬くんの表情がかたまる。

「亜嵐なんて、いなかつたじやんね。」

「つていうか、LEO、いつたいどこ行つちゃつたんだろ。一瞬で消えちゃつて、びっくりしたよ。」

「ホント！ せつかく会えたと思つたのに。」



女の子たちは文句を言いながら、わたしたちの前を通りすぎていった。

「ヤバ。本当に気づかれてない……。」

水無瀬くんがおどろいたように、もう一度鏡の中の自分を見る。

「でしょ？わたしの変身メイクのおかげだよ？」

わたしは腰に手をあて、えへんと胸をはつた。

「あなた、芸能人なんでしょ？人がおおぜいいるところに行くなら、今度からはしつか

り変装したほうがいいと思うよ。そんなめがねだけじゃ、意味ないし。」

わたしが言うと、水無瀬くんは、ムツとした顔で口をとがらせた。

「なんで出かけるだけで、変装しなきやいけないんだよ。俺はただ、このあたりにおいしいコーヒーチーズケーキがあるつて聞いたから、探しに来ただけなのに。」

その言葉に、ハツとする。

（そうだ。コーヒーチーズケーキ、忘れてた！）

「ごめん、返して。」

わたしはひつたくるように水無瀬くんの手から鏡をうばうと、

「じゃ、わたしはここで！」

くるつと向きを変え、早足で歩きだした。

すると。

「ちょっと待つて。」

うしろから水無瀬くんがわたしを引き留めた。

(もしかして、わたしのこと、おしゃれなイケてる女の子だと思つてゐる?)  
変身しているとき、こういうことがよくある。

「モデルになりませんか?」とか、「お茶でも飲みませんか?」とか。

だけど、ごめん。

今は、めちゃくちゃ盛つてゐるけど、本当のわたしは、存在感ゼロで誰にも気づいてもらえない地味女子。

お茶なんてのんびり飲んでたら、さすがに正体がバレてしまふかも。

「ごめんね、ちょっといそいでるんだ。」

いつものようにモテ女子になりきつて、手をひらひらと振り、そのまま、歩きだそと

したら。

「きみ、佐藤さんだよね？ 同じクラスの。」

その言葉に、サーツと顔から血の気が引く。

(……へつ？ なんで？ わたしつてバレてる!?)

「ちつ、ちちちちち、ちがいますけど。」

思わず声が裏返る。

あせつていてることに気づかれないよう、背中を向けてそのまま行こうとしたけれど、足音が近づいてきて、ポンと肩をたたかれた。

おそるおそる振りかえると、水無瀬くんがにつこりほほえむ。

「ちがわないでしょ？ シャルマン学園中等部一年二組出席番号十一番の佐藤杏さん。」

よどみない水無瀬くんの声に、がつくり肩を落とす。

(……うそ。なんでバレちゃったの!?)